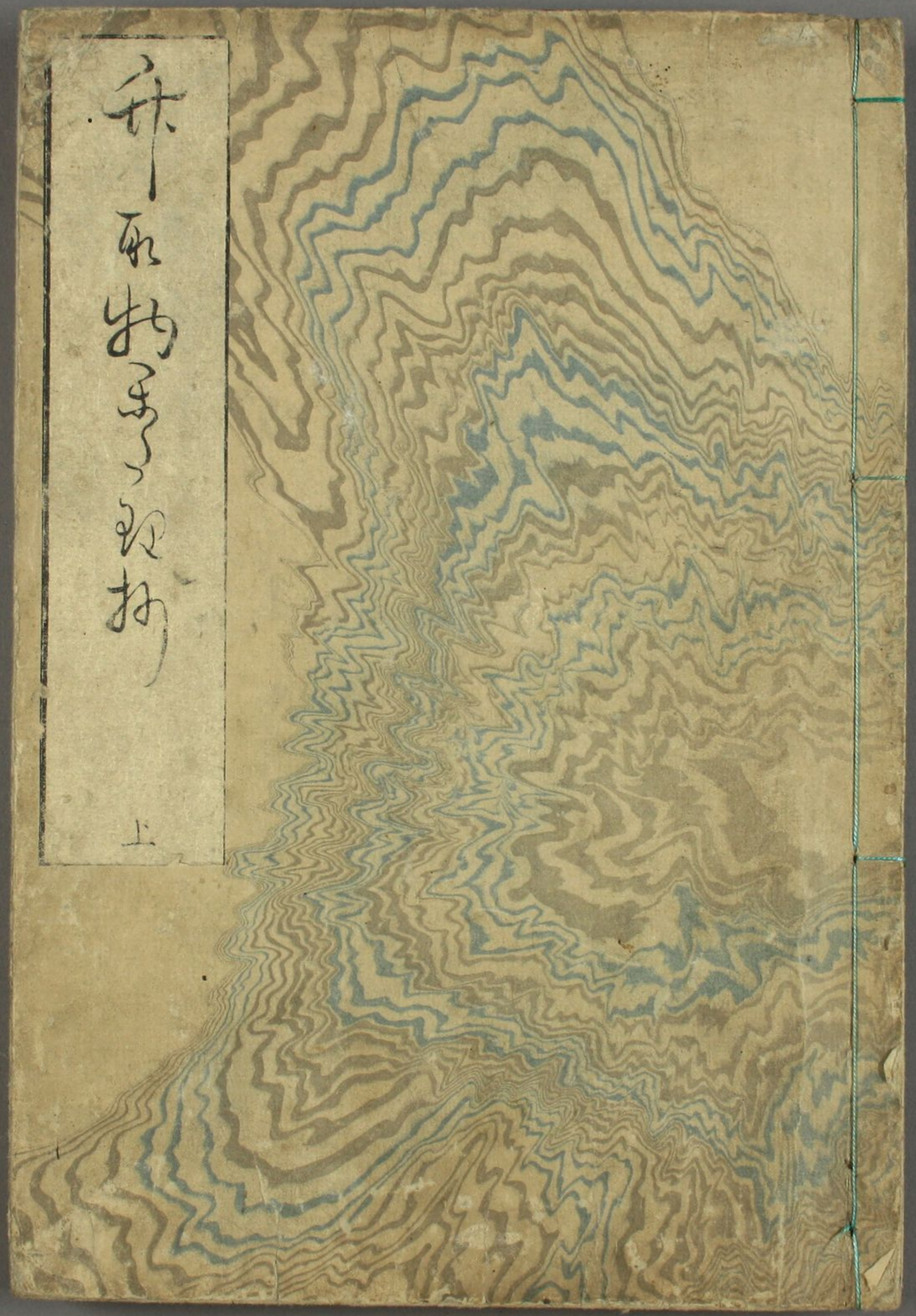


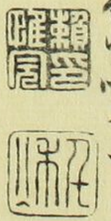
序

友人山伯鳳竹取語注成冩其人之
与学可以堅見也我社自為奇士
玉台宜乎伯鳳實奇士也伯鳳耽書籍
極該博特善讀史嘗謂丈夫處世志于事功苟酒不志于

多而文事自衛者陋之又陋曰之
道惟學在躬豈睹乎佗美哉生
志於親戚之親朋友之交善愛生罹
處共得之于學於是乎伯鳳之事
亦益奇乎何生僻編奇褒郛余在相
所溝瀆石出瘖治之書視之伯鳳之學

平當永岸厥而生文膠漆以其趨一之歟已
學也文也君子必爲斯捺皮相之所
得乎郎士龍之笑元章之潔謂麥生
人而乎伯鳳注此取語是其病間之心止
奇自爲已伯鳳畫盡于彩願麥粗識伯
鳳共得朱云乃益奇之又於淺余與伯鳳

學如氷炭不相容而其交不啻探湯
有由矣伯鳳曩英主錄魚為卷乞予出此
書以屬序予余以為深也伯鳳名儀者
浪速人
天明癸卯秋日蓬德三識



（竹取亭二）

小山をしかやへくのいとこ
なるうけたまはりやとのことを
のうへをもとめしかせよとて
へとのたまひてせよとて
きてよとて日をうつまで
あるしくの月をおく
森よりの人くの月をおく
まうす新よりもたまき
うまつる一日たまの物

古事記曰天宇受賣命者猿女君等祖也

日本紀曰勅天鈿女命汝宜以顯神名為姓氏因賜猿女君之號故猿女君等男女皆呼為君此其縁也

今猿君宮造と云ひつゝみだれる様めよろしからず但しみやつこの様めをもて断そうるはあらそさく事れ出くるをおそれてなをもとの様なるべし

竹は木草の中より益ある物なれば。

もろこしにても。淇園千畝竹其人與千戸侯等ぞ記して竹園ぞんほそくらん。諸侯も富まおほらそぞいみなるべし

猿君宮造と云 本書名造績日本紀可追考

かゝれば竹の中よりもいでたる竹なれば一そうぞ

けなれおよひとくて。
おそるゝところをそうろうをそうろうて。といふと同さ。

邇水ニ有ニ三節一大竹流テ入レ足ニ間ニ聞ニ其中ニ有ニ歸聲一剖テ竹視レ之得ニ一男兒一歸養レ之及レ長有レ才武自立為ニ夜郎侯一竹為レ姓按ニ華陽國志一如レ此幽怪録云廊延長史有ニ大竹一凌レ雲可ニ三尺圍一伐レ之見ニ内有ニ二仙翁一相對曰平生深根勁節惜為ニ主人一所レ伐言畢乘レ雲而去夷堅續志

筒順う和名よ津、うつくしくて

珍奇日本紀

端正

端嚴

愛乃

ひかりてのうへ。そなはりてゐたまへり。三寸許なる人。
いやうつくしうてゐたり。
もとより竹なん 志怪録曰。嘗テ聞ニ外
舅説ク頃歳荘墻間。熒々トシテ光ル一餘。時異
兄弟中ニ有ニ不寧者一。謂テ之ヲ忧ト憂フ之ヲ數タ
炳然如レ初。外舅性不レ甘。乃就テ抜レ之ヲ得
一物ヲ回ニ燈下ニ看レ乃竹根耳。其光遂ニ
滅ス病者無レ咎。仙ノ人ナル事ナルベシ。
異苑員當竹中有人三寸許云と
筭當竹節中有物長數寸。絶似ニ人形ニ
俗謂之竹人 契沖阿闍梨 後漢書
西南夷傳曰。夜郎者初有ニ女子一浣ニ於

まにうち入て　神楽なども
大きなのちひさ小舎人ども
なりはてゝまゐれり
まゐれるれハ　古語なども
ハ賢うぬぬなまゐりて
ハ筥ども入てやしなひ
あれハ幼稚れまゐりぬ

めれ女まゐれり　舊本今昔
物語第卅一竹取翁語云
家ニカヘリテ妻ノ嫗ニ
篋ノ中ニレテカヘル女
児ヲコソ見ツケクレト
云ケレハ姫モ喜ビテ初
ハ籠ニ入テ養ヒケルニ
モよゝれり女ハ姫のこと可
改和名云説文云姫
本無和名
奈老女之稱也ゝ文姫之
入りてとあるもおもひめぐらし竹
をとりのおきなのこと
といふを思ひてまゐれり箱
ハ筥のまゐれ誤なり舊本今

竹取上 二

竹取物語の全文はこゝに載せ

そぐるあふ竹をみたるまゝかゝなり

ぬ

よゝれり　両節間順和名抄俗云與
河社智度論第十云真珠出魚腹
中竹中蛇脳中

かゝるおやゝしゆゝしたなりゆれ九ゝ
ちごやしなひそゝしとおほこ
まなるまゝこゝかゝるなほゝれ
よゝるおぼなまなりぬまゝて髪あげ
どそゝしてかゝるぎさせさちやう
うまゐりもこゝめ

そゝし　俗氏名のかなよそゝし

竹取物語

神楽なども
大きなのちひさ小舎人ども
なりはてゝまゐれり
まゐれるれハ　古語なども
ハ賢うぬぬなまゐりて
ハ筥ども入てやしなひ
あれハ幼稚れまゐりぬ

めれ女まゐれり　舊本今昔
物語第卅一竹取翁語云
家ニカヘリテ妻ノ嫗ニ
篋ノ中ニレテカヘル女
児ヲコソ見ツケクレト
云ケレハ姫モ喜ビテ初
ハ籠ニ入テ養ヒケルニ
モよゝれり女ハ姫のこと可
改和名云説文云姫
本無和名
奈老女之稱也ゝ文姫之
入りてとあるもおもひめぐらし竹
をとりのおきなのこと
といふを思ひてまゐれり箱
ハ筥のまゐれ誤なり舊本今

竹取物語の全文はこゝに載せ

そぐるあふ竹をみたるまゝかゝなり

ぬ

よゝれり　両節間順和名抄俗云與
河社智度論第十云真珠出魚腹
中竹中蛇脳中

かゝるおやゝしゆゝしたなりゆれ九ゝ
ちごやしなひそゝしとおほこ
まなるまゝこゝかゝるなほゝれ
よゝるおぼなまなりぬまゝて髪あげ
どそゝしてかゝるぎさせさちやう
うまゐりもこゝめ

そゝし　俗氏名のかなよそゝし

竹取物語

神楽なども
大きなのちひさ小舎人ども
なりはてゝまゐれり
まゐれるれハ　古語なども
ハ賢うぬぬなまゐりて
ハ筥ども入てやしなひ
あれハ幼稚れまゐりぬ

めれ女まゐれり　舊本今昔
物語第卅一竹取翁語云
家ニカヘリテ妻ノ嫗ニ
篋ノ中ニレテカヘル女
児ヲコソ見ツケクレト
云ケレハ姫モ喜ビテ初
ハ籠ニ入テ養ヒケルニ
モよゝれり女ハ姫のこと可
改和名云説文云姫
本無和名
奈老女之稱也ゝ文姫之
入りてとあるもおもひめぐらし竹
をとりのおきなのこと
といふを思ひてまゐれり箱
ハ筥のまゐれ誤なり舊本今

竹取物語の全文はこゝに載せ

そぐるあふ竹をみたるまゝかゝなり

ぬ

よゝれり　両節間順和名抄俗云與
河社智度論第十云真珠出魚腹
中竹中蛇脳中

かゝるおやゝしゆゝしたなりゆれ九ゝ
ちごやしなひそゝしとおほこ
まなるまゝこゝかゝるなほゝれ
よゝるおぼなまなりぬまゝて髪あげ
どそゝしてかゝるぎさせさちやう
うまゐりもこゝめ

そゝし　俗氏名のかなよそゝし

竹取物語

神楽なども
大きなのちひさ小舎人ども
なりはてゝまゐれり
まゐれるれハ　古語なども
ハ賢うぬぬなまゐりて
ハ筥ども入てやしなひ
あれハ幼稚れまゐりぬ

めれ女まゐれり　舊本今昔
物語第卅一竹取翁語云
家ニカヘリテ妻ノ嫗ニ
篋ノ中ニレテカヘル女
児ヲコソ見ツケクレト
云ケレハ姫モ喜ビテ初
ハ籠ニ入テ養ヒケルニ
モよゝれり女ハ姫のこと可
改和名云説文云姫
本無和名
奈老女之稱也ゝ文姫之
入りてとあるもおもひめぐらし竹
をとりのおきなのこと
といふを思ひてまゐれり箱
ハ筥のまゐれ誤なり舊本今

竹取物語の全文はこゝに載せ

そぐるあふ竹をみたるまゝかゝなり

ぬ

よゝれり　両節間順和名抄俗云與
河社智度論第十云真珠出魚腹
中竹中蛇脳中

かゝるおやゝしゆゝしたなりゆれ九ゝ
ちごやしなひそゝしとおほこ
まなるまゝこゝかゝるなほゝれ
よゝるおぼなまなりぬまゝて髪あげ
どそゝしてかゝるぎさせさちやう
うまゐりもこゝめ

そゝし　俗氏名のかなよそゝし

竹取物語

かみあげとそ髪のことく残りつゝ
そぐなう髪そゝさもつて
万十三「おろしこおくしのや
よそ白髪数のふえを
るそでとうるそしみすゝ
「そらぐ髪のてれるなど髪
わづらねーふなるそらうハ
髪上つゝんう 允恭紀云
妾自結髪語後宮云と
そうしてそもう髪るまそ
参して允左右して八と
からしそのことく
さらやうめうも 和名鈔云
帳屠有九帳之名所出未
詳

うてとそし注ものなき髪りつゝし
そそその用事」岷江入楚よ直々歟とそ
よさほぐなる 晋趙「未年八歳一夕
俄長身長八尺髪鬢満額瘤異志 かみ
あげ 結髪「そうして 左右ニテなる
一一
いつうつぎこやなるほぐよそちぐ
れかもけそうなる事をうれくや
のうをハそうをまそうなる九ゆうみち
ゆ
原氏物語よいうかしごそとそし齋
冊 寵愛「やのちいそうさそうな九

衣通姫れ発こうやうて衣のかよ透う
そうな類なるぐし拾遺記曰蜀先主
名甘后入納帳中於戸外望者如月
下聚雪 学なうそうてそよたぐひな
けそう それがよし九いろぐ
るくあらハなることし 顕證
羽こうもあ九そうきれもはなる
ぐそうてしきるをなれふそ休こそ
そうて竹をほうれをうそうなや
そうそうな
ちぐそをゆうたなうてそれの

なよたけ　源氏帚木巻
よ、人がれをねぎこと
ばれう、はゝきゝろを
をてろくをれバなと竹
れろもてこと注なな
よ竹ハやろうくさの
もはゝき竹こ詩哥と
いをこと、なをハやそう
うとつぐろくこ河海
抄なよし柔こて
万二、なゆをけのとり

石自ゆなゝぬほとし、はうこるろとハ
宮て才のなの九あるゝか
みるをいる杉ほまたなりぬれバ、ろをで
すむろぐいんごのあたなよびてつけ
竹ろ
三室戸齋部秋田なごて、但し作
名なれバ、ろひく考たなどで「な
よ竹　竹れ總名し奈用竹　又奈
陽竹　万葉注ゑ、仙覚曰、なゆをけ
とて唐竹なつゑ、なを竹といふ、
同肉桐通也、なご九てとほくお

る等とよをるもどをる
ろてぐをく九同しくだ
ゆろ過てだをる
なう

みよまをて、なゆ竹のをくゝふともて
ろう「かぐや姫　耀夜姫　赫夜姫
契沖曰、古事記垂仁天皇段ニ云、又
娶大筒木垂根王之女、沙本之大闇弁、
生御子表邪弁王ヲ云々、ヲ
ほどニはうちあけてうそぶよう
のをぐひをぐ、ろくをれをゝ、ろうきこう
ろぐよほうくいもこ九あて

うちあけ　内擧「うけひきこいそ　承
不婚　保日本紀「よこほどくく　夜晝
経程　よゝひおれくはをゝねく

と訓ぜり　チアのタダなれバ　樂の字も　顕宗紀に詩
王室壽絆云　抱玉常
世等云　絆云　抱上聲者
飲酒義也
うけさ〳〵ハを　仁徳紀　蓋
迩ぬ天　容之如地　の容を
ウケイルルごとくまれバ容
不遍　もあるべし

高貴　き名作也

あわぶなう
世界をものこゝろいやしきもいと
うでうのかくやひえ枝えてうぐれ
ぶちとおよびてきてめでゝおぞ
あてやかに貴也　仁徳氏のあて人とてよ
老人を注せり　なてやうなるよ
氣貴　しえてごまとかく
やひめ給いうごゝて娶らんとおもふ
なり　万葉よ　藤原卿娶采女安見児
時せうた　わまてもや　安久也えうこ
と　をめ人のそうぞてなすとうやをこ
ううう

いつのとうもろこしのあるうれかなるよ　いつのとうもろこしを
そやそくうふもしさるの残　長恨歌　養在深閨人未識　たゞやそく　軽爾
とも　もう　欽明紀　不可軽爾而伐　て
やすきいつもめを　万十二
うぐるこるよ　よもあつて
のやち川も　安寝もぬず
ようくうくうう
よふくひ　万十三　もろ
そのそうをとうとよ

竹取抄

垣墻　容易　たゞをおし　いつもねぞ
うちとうてねもやわうくうなか　萬
葉よ　彼夜者吾毛　妹毛ねのひてこゝも
七住日比　あてもねぞ　おちう日比
物法よ　あもいもねぞぬそなとゝし
覗　垣間見　視其私屏　日本紀　喚

そんそれよそか。そこよ
ハ夜延とちう。契沖云夜
南闇のことなるべし。源氏
玉鬘そえけうくしく人ぶた
かくれきらはるおとど
ようてひくれこと。古事
記、八千矛神詔辞も。佐用
婆比弖。阿理多久斯用婆
比迩。阿理加用婆勢ぇと

人のもれこと　はもれこと。
物音の略語乱ち十四
さぬるくりやをのと
乃。ようそくも。斧の音
なうとひく其が第四は。
夜音之遠音第二は浪音
乃などあるこうあう

よどひとそ。ひかうのまこ。夜といふ
こうかうて仮うなもし。結婚（ヨバヒ）万葉
玉葛そえけうくしく人ぶた
かくれきらはるおとど
ようてひくれこと。古事
記、八千矛神詔辞も。佐用（ヨバヒ）
婆比弖。阿理（アリ）多久斯用（タクシヨ）婆
比迩。阿理加（アリカ）用（ヨ）婆勢ぇと

人のもれこと　はもれこと。
物音の略語乱ち十四
さぬるくりやをのと
乃。ようそくも。斧（ヨト）の音
なうとひく其が第四は。
夜音（ヨト）之遠音（ヨトノ）第二は浪音（ヨトノ）
乃などあるこうあう

おろのおる人　疎畧なる
人なり。方十八。おろのおぶ
これはおもひしるべきある
日を要とうつそあます

いろくおもとうつそ　儚
おぬしおもひのうれうど
好き侭のうつ侭とうそ

はなそ
ハよ
てご

歩行（カチ）いとしれしよなな

そのみそ——一本云。
仮しなん活会そ云信
の縁（ヨスガ）うちれうぐをを
て。大和そみの物ひかた
めのうつ侭そうそ。てあ
へあしうそいうへ乃

竹取抄

もろこしの人の名をなづく。

中納言石上麻呂足 人丸 安倍仲麿

右もろこしにわたりて唐の人となりて
ありき 万葉にいくたびかありき九
もあり。ありけむ。やそうもあるべきさ
を。かくかくしなどすれ
ども 欽明紀云食
不甘味寝不安席 万十
六 立住(タチ)ともう訓(ヨム)
わがくる——万四 ほかれ
くるむ人をくゐ思(モ)
おもほし 論語(ロンゴ)終日不食
以思(オモフ)無益(エキ)ぞかの

口どとよめり。惑歌ともいへ。
幸ま国窮(イデマクニキハ)をそ人をわび人
とつづけたるうたゞ
雲(クモ)月(ツキ)ともそれ——
もろこしまでもおもひやるよすがの
ため。雲月とつづけて九月(ナガツキ)十日(トヲカ)
国(クニ)ゝ十一月(シモツキ)ゝ月(ツキ)ハ同(オナジ)
事なれどもそれ月(ツキ)ハ同(オナジ)
事なれどもそれ月(ツキ)ハ同(オナジ)
事なれどもそれ

神代紀注所生児必當男矣
万九父母がなりのまに
ぐしもてみおのみことはそと
今俗ことおなりのみことい
ふ 剛(コウ)故也遊仙窟

強(コワ)

軽(オロカ)易天智紀

狭衣ま中納言はらけのに
ばし狭衣をいもう詞
ぐそ此の人はかもんやうに
へんげのものやとおぼえ
給ふらん

疎(すさ)

あくとらみ　アバ多汚穢也　他
あり　日本紀ニハ放逸狩
アダシヒト　黒手松ともよめり
かーくらく人なりとも　五畳
いせの海猟もろともにする
なとかかーくらく人なるへき
きらむ

ちくらうみ　アバ多汚穢也　他
うみ　日本紀ニハ放逸狩
アダシヒト　黒手松ともよめり
かーくらく人なりとも　五畳
いせの海猟もろともにする
なとかかーくらく人なるへき
きらむ

うつほ　まの　ふみ　そら
これ　おく　ふね　と　ね　そら
もろ　ひろ　しら　はま　こと
おきみ　古今　ほ　もも　ち
ひろ　しら　ふ　ふじ　も
よめり

おろう　一万十八おろうぞ
るれハおもひ〳〵おのう
らのありうのめぐり
也れあろぞろう。はおろ
うぞとあろおろそ
まぞれしつしぶ大更系
てみの大言ろおきそそ
ろに也月ろ郭ろの
をろうめぐ〳〵ぞ
ろ母ぐにおろろろう
ろひろるれバし
そもし　抑(そも)也仁知字書
反語辞。又然之辞。又発語
辞　大和訓内ろ大にの
由縁の娘ろ有ろ也のと
ろ也ろ。そもしく
ろれろとそもあ
し

竹取抄

いさゝう　一万十九いさゝう
ろ彩ろひろくまを因ろ
の浦ろろろあろろて一
おつめぐし　軽小日本紀
つうふまろ　従身雁中紀
ゆうき　古事記雁神天
皇段云成人是喪(うき)し

若箇遊仙窟　かぞうろというぞうし
耶(イサヽカ)　ひとしかんなうとい齊(ヒトシ)きとし
優劣(イウレツ)　事(ツカフニル)　ゆうしさそのふめぐろ
しきおの事なり。ろろきかをそを
よあろろのよ〳〵ぐらふ九ろをまろよ
るなれバゆ〳〵うをれしろあおも
そん　そのおろすん人とハ人の人人
なわ　肯(ウケツ)肯承諾(ウケツ)
はろろ〳〵はぐまろのあつまりぬ人て
あろあそろをろふ或ハなをろろ
ひぐ或ハまあうそ〳〵おろふ
まつ〳〵ぬをろと向白く
吹てあいそうそたら

かぐや姫の昇天

かくてかぐや姫の昇天を見送った翁は、悲しみのあまり病の床に伏してしまう。

（絵）

（詞）

（歌）

ここなり

ハもろこしにある、ひねずみの皮ぎぬを
ぢく、大体大納言まで、きのくびなる
おもまうぶ玉あり、それをとりて
たまくいとのみれ申ばしハをそ
らやめかおもとの公と
契沖何社ともいまく、詩ニ曰、由酔之言、
俾出童羖注ニ曰、童羖無角之羖羊、必
無之物也、史記封禅書ニ曰、齊桓公既
霸會諸侯於葵丘而欲封禅管仲曰
云云於是管仲賭桓公不可窮辞
曰設之事曰古之封禅部上之泰

まし　それさま事なり、さようの
ぶつ、ぜ、ぜ
大和物語ニも、川ぞひ、それを
る水をさいふ、それをいふ
てあのかんくなるかんくを
いつかいふことまでなりと
いひてといひつゝ

舊本今昔物語云皆心ヲツ
クレテ云セケルニ、女初
ニハ空ニ鳴ル雷ヲ捕ヘ
テ将来レ、其時ニ會ハン
トゝ云ケリ、次ニハ優曇華
トゝ云花アリ、ソレヲ取テ
来ラン時ニ會ハントゝ云
ケリ、後ニハ夜打ニ鳴ル
鼓トゝ云モノアリ、ソレヲ
取テ将サセタラムヨリ
ニハ、自ラ聞エンナドゝ云
テ、會ザリケレハゝゝかく
やめかおもとの公と

かぐや姫よ、たの
たてまつりし
入くかぐや姫よ、石たてるのみこそ、佛の
たてるのそもれしつゝおもあり、そまで残り
てきよくとつゝそもものこゝろ、東の
海よほうらいといふやまあなり、みまま
ちのみをねんじ、そのやまをみるに、白
金をもてつくれるあり、それ
枝をりてとらんとつゝ、おもの

北里之禾索隠曰韋昭曰設罟以為
盛江淮之物可得之物
東海致比目之魚西海致比翼之鳥
云云於是担公乃止又刺客傳荊軻
賛嘗隠曰燕丹求歸秦王曰烏頭白
馬生角乃許耳丹乃仰天歎烏頭即
白馬生角風俗通及論衡皆有此
説仍云廐門木馬生肉足也
らのるねなるぐ
ゑかうすまるまるまる

もたくハシタ、クミの畧訓乱

あるときにハ　ちをとるあまとなさせてでハ　ちをとるあまとなさせてでハ　ちをとるあまとなさせてで

和名鈔大和國十市郡
不審

百千万里　百里千里万里と次第
よき事ぬるて挙し。唐詩に。後の天竺
よ釈を送る程よ。十万里程多少難。
なるらつ日しよ物し。ととをち　十
市郡　ととものこほりくもりから
なり

あるいはまよびんだるまよふほをもち乃。
もくもくろをみださるほをとりて。
きのふくろよ入く。俗ちなの杖よつくて。
かくやひめのかまてさてみせられば。
ひんつほ　四分律云。賓頭盧、本此優
填王、臣由精勤故。王放出家。得阿羅

龍をとりてかうむりて
うちふるひ玉ばよなどした付
ふ本。上古の風こ万十
ふ年の夫かけくれ乃
ふおろしけ松落ふれ
どあるあるも

漢賓頭盧翻不動也。感通傳曰。今時有作賓頭盧聖僧像。立房供養。亦是一途。然須別施空座前置椀鉢。至僧食時。令大僧為受。不得小僧家盤盂設之。凡聖雖殊。俱不觸僧食器。若是俗家。則隨俗所設。恐僧不知。附此編出。

鉢　順和名鈔學佛道者之食器也。胡人謂之盂。

混黒　くろくそめたるあやしうりてくろびたち

はちをそこのとをるかたなし
ぶつ。釈迦大和の國十市
郡におはしますところ
にて。あぐべし。大和志云。

蓬莱玉枝

はね姫
おしなべての木のえだにはあらで
石造佛の
うみやまのそこよりとりてきたれ
ふいしのそこにあるなごれ物
かぐや姫
白山の姫君のけさうのためにとてぞ

續博物志云。佛樓沙國有佛鉢。受三
升許。青玉也。或曰青石。或曰雜色而
黒多。四際分明。厚可二分。貧人以沙
華投中。即滿。富人以多華。亦復。百千
萬斛終不滿。或曰在月支國。又水經
注。西域有佛鉢。今猶存。其色青紺而
光云云　河社記云。波斯

國釋迦佛之鉢。在此王宮南山住
持感應傳曰。世尊初成道時。四天王
奉佛石鉢。唯世尊得用。餘人不能持。
如来滅度後。安置鷲山。與白毫光共為
利益。四天王各以一つの石鉢をもちて
ふたを。佛にまつりてをいてひと
つとしてなくなりぬ

はね姫
おしなべての木のえだにはあらで
石造佛の
うみやまのそこよりとりてきたれ
ふいしのそこにあるなごれ物
かぐや姫
白山の姫君のけさうのためにとてぞ
なりぬれいをぶつみやまで者なり

廢小倉山寺倉橋上峰号
小倉山ニマシ即十市郡ノ
万八　夕されハをぐの
とやまる雨のふらんハ誰
そいもとをとめ

業平朝臣　おほかたハうき
わぐら火よ小倉のやまのともしかと
螢火光神　うまて秋の風そのさく
やうなるをとめ　閣

石造御手
洗

竹取上十八

文選ニ鞅掌カハツラヒトヨムトラクヨウ字彙云詩
小雅王事鞅掌鞅所以拘物ニ言為王事所拘也　鞅
與快同快不服也情不定
ラバ恋風勇高上ニ思ヒヲ
ヨセテ　ソヨカセテソヨ
ヒヨセヨカシ
ヨセテ　ソヨカセテソヨ
ヒヨセヨカシ
車持をくらもちとよめるハ
ルてのあやうなれハし

姓氏錄ニ曰豊城入彦命之孫雄畧天
皇御世供進乘輿仍賜姓車持公ト

[illegible]の国[illegible]
うんとて
[illegible]は和名鈔云筑前
築紫乃三
知乃久知
六云帥大伴卿宿次田温
泉云云湯の[illegible]
きびは玉ぐく時[illegible]
[illegible]
又古集は何[illegible]
のごひがたく[illegible]
むとて[illegible]
[illegible]散木集云ぬ
共[illegible]
[illegible]の国のむらと
[illegible]
[illegible]
おそたそ[illegible]
[illegible]

[illegible]うたがう　[illegible]思慮のあるし
神代巻曰思兼神有思慮之智

おほや事[illegible]
[illegible]
[illegible]

たくつのこころまなびしるしをらよ況ここのてだくみをもまねびしりてもちゐよみたくつのこころまと脱そうゑ

云四聲字苑云鍛冶打金鐵為器也鍛冶訛也えし。
もろもろびとをめして。たくみをつくる人をえらびつどへ。
みかどにもろもろびとおほくつどひ
参よ。もろもろびとぞみの
うぐひす二十人ぞうかとも
もてくれバお内(ウチ)のおほ
よバよ者よおほつぼね古婆
よなどひくかぢとをへ
さるおほ。うはお内も深
順仏と仕(つかまつ)ふおほ
臣(オミ)一ぞれうぐひすと
もよりてうちよ(ウチ)
ちくつことあるて鍛工(カヌチ)
気(ケ)金鐵をうのよう。
みうをうえ況ず

みうたくつ人をえらびて。たくみをつくらせ。
入給ひてまかでさせ給ふをたくつ
かなて事うれ かなていひうら
てはなれバよ ひとつのたく
ら物ぞいそぎ給ふ人の
はもる名人の匠(タクミ)なるべし 内匠(ウチタクミ)
うん百の大工し きこめもろ
ともろをえらびてよ
うるわ我。うへはそえて。たくみを
入給ひつ。たくもも回(メグ)るおひ
臣(オミ)一ぞれうぐひすと十六ぞ我
もよりてうちよ(ウチ)ふおほ
ちくつことあるて鍛工(カヌチ)
気(ケ)金鐵をうのよう。
みうをうえ況ず

うこんさうえ　クエのタケそ。
法華經をかくる紙寢化
城へんぐるよりおぐとし。
そばそくへばらくうつて
白こそうひをおし。
こぐひかそさく〳〵白き
玉をみ〳〵そなそ作ふ
とかとりて。くそたう
んぐるとつつ作ふさる鈎
ほうそうそ　ねるよう
うゆつう

ほるそ
うそ

なるぶうどんそ順和名曰。櫃。蒋魴切。韻云。
櫃音與貴同。和名比都。俗有名似厨
厨櫃韓櫃折櫃小櫃等之名。うがで
向上開闔器也　うどんぐるえ
んげし。翻譯名義集云。優曇鉢羅。此
云瑞應。般泥洹經云。閻浮提內有尊
樹王。名優曇鉢有實無華。優曇鉢樹
有金葉者。世乃有佛　抱おはいてと。
も様ささめれどかけそそ　仰ぬそて
そ〳〵ねめつしこそ死そて。ねそのぞ
そうあそと。我人をうのそわぐくさ

といつれくそしかうえまさりまして
居くまつ
おなぞたくおつ　漢武故事曰。
をもつ
神屋前庭植玉樹珊瑚為枝。以碧玉
為葉。或青或赤。悉以珠玉為之。皆
空。其中如小鈴。鎗くと有聲　そそく
ハそうすし　かうそうれ糸かな
つぎおらせて。旅りまそしめほ
ていをちそくはし
もそよくおはれてあうあおまの枝
をぞそひりまくとのおほうく
おてまわるぶりうそんそもち

源氏最古写本・松ゲ下写本
ばくんようの字体にハ
まづもちゐられてゐる
今俗文字とおもふかと
つゐにしまもつゞきと
いつまでも通つゞいた
元和古刻本ところどころ
も片仮字ハやくゝといへ
ども漢文ハ胸ハ破ま
みだりてところどころかけ
ゐ狭衣ハむかしをつ
かつてゐる

なるべし　えづしき枝なまでうと
んげとハいへ
うまうまかゝる姫さまて　糸ハ比ゝ
ますますめづ　めづとむよつめれくおもふ
かゝほどに門をたゝきて　そこもち
のたまふ　心塡（ママ）もなやそし
旅のたちなれなるかく　命をそ
彼ものゝ枝とてまゐるとて　かゝる姫よん
をすうぜんとそ　ゝおもふらた
ゐ此ものゝ枝よりこぶつきなりくら

かつてゐる　さてこを
ハゞをもてゐまハゞ
けんそハかつてゐ
ハゞこゝをやなどを
つきたがほてゐをそれ
まゐ仮字まがほてもえ
ゆまらでいうしてハかく
て通つゐる

車持御子
いつゞゐて
なをゐて
ゐ枝をもて
かゝる
ゐれまれ
竹取の翁
ゐ正うし
あやうの
まもう
おしの
うくハ
旅のたち

哀不忍聽（イトヲシガル）紫峻（ミネ）紀（キ）

いとうつくしげなる
いとをかしげなる
よびこえ
かくわひあへるほどに
なでうわひ
とをしほるばかり
あさましう
永（トヲル）一向（ヒタスラ）
つゝしみおぢかしこまりて
淺猿（アサマシ）
姫（ヒメ）一向（ヒタスラ）
最愛（イトヲシ）
びんぼうそうなどいふ
いとうつくしげなる
いとをかしげなる
よびこえ
かくわひあへるほどに
なでうわひ
とをしほるばかり
あさましう
永（トヲル）一向（ヒタスラ）
つゝしみおぢかしこまりて
淺猿（アサマシ）
姫（ヒメ）一向（ヒタスラ）
最愛（イトヲシ）
びんぼうそうなどいふ

おもなう　辞

もかくあはきたにもちそれはねうみれ
くめ
らしよいねいぬやのうちまろひなどをゑ
おそろまよをやう。いうなはゑるの。け
河辻ゑ菜のうのみれ枝はうはて
おれ国ゆうれそよた大ねねおは
いなはうこをしえぼうらの乃
ふれまくのこうそのうまうそかくい
しきろねいまうふそろだ
う。ぎう。くのうう。あそもなきお

教はうそひうめうて

神武紀云到難波之碕會
有奕朝大急目以名為浪
速國亦曰浪華　万十五

竹取抄

なかうはきたにもちそれはねうみれ
もかくあはきたにもちそれはねうみれ
くめ
らしよいねいぬやのうちまろひなどをゑ
おそろまよをやう。いうなはゑるの。け
河辻ゑ菜のうのみれ枝はうはて
おれ国ゆうれそよた大ねねおは
いなはうこをしえぼうらの乃
ふれまくのこうそのうまうそかくい
しきろねいまうふそろだ
う。ぎう。くのうう。あそもなきお

神武紀云到難波之碕會
有奕朝大急目以名為浪
速國亦曰浪華　万十五

竹取抄

とも城つちくたにそう。玉の枝なこ
寺もろう。文遅ゑ珊瑚をたうのえく
と點せう。寶樓閣経云上古生二竹
金為二笙葉一七寶為レ根。於二枝梢一上皆有
真珠一云く小牖別記海外有二蓬萊閬
苑第一山一曰二廣桑一有二瓊樹一之林。又有
瑤枝一云く海内十洲記曰。玄洲有二金
芝玉草一云く圓機活法曰。玉枝。漢武
帝得二西那國玉梹一賜二近臣年高者一有
レ病則枝汗一云く

大伴のみゆきまうで給ふ物の
くらもなくてぞつきの給ふ
いまくもんまれ

みくらゐて海中より出てゆきかくれ
まうでこんおぼえてかぐやひめ
らでおの井よりいでなんとおも
もいひしらばこそでもかきあはせ
きてありし翁もれば
てあんうざう・からありてほう
らいといふやまあり・海よこ
ぎさぶらひありて・本国の内裏
なれくあるさーに

さるべきしるしとて・不死の薬をたてまつ
をとゝをし遣し彼方へまかれ
おほくさうのくすり

さるべきしるしとて・不死の薬をたてまつ
きつまとゝし「おもひのなぐさめ
ふの根をとりてなんし「むかへ

おうみやういけるもの
日鞅字苑曰鬼人死神魂
也字治拾遺傍多俗
海のはて悪風ふきあらて羅
刹国へ流し事なと
うくく
むくつけなるもの
毳動気ともおそろしき
なり

風也 王維送鼂監詩帰帆催信風
命もあれて 命なくてぞひなし
あはれめでくあるかひ
ぬべくおほえて・おほのやうなるものの来
てくろきんとしを・求まどひて
あるさまにて・海のまさめんと
なるかてにて・その
ものの・我ものいふこゑ
ものゝ・ことにあらねば
めのちをたく

文選海賦於是漁子祖南極東或沒於蒼
或掣ニ於黿鼉之穴ニ或挂ニ罥於岑山之峯ニ
ニ於黒歯之邦ニ或乃淖流而浮轉曰
歸風以自ニ文ニ
文選招魂東方ニ長人
千仞唫魂是索南方ニ雕題黒歯得テ人
肉ヲ祀シ其骨ヲ為醢ニセヨト此ノ外夜國巴大
温ナド
ソノ
ヨ

万四ヤヲロハカリアリノ表
ニテ春ヒラケアヒニ咲
ヲ木ノ如ハ為ス

ヲモヒヲロカニシテ病ニシテ紛方
ヲモヒヲロカニシテ毎ノ如ク更ニ
ヲモヒヲロカニシテ
ヲモヒヲロカニシテ船中ノ人ヲ取テ
ヲモヒヲロカニシテ
ヲモヒヲロカニシテ
ヲモヒヲロカニシテ列子曰渤海之東有ニ五山ニ仙聖員嶠
方壺瀛州蓬萊也其上皆金玉

天人のよそほひもろふ女ら
出まて。もろともにあるへきよしをいひ
水をそゝみあらく

かなさは　順和名ニ曰。日本霊異記
云。其器皆銕和名加奈未利　洛陽伽藍記
云。以金錐汲水。五色絲為綆云々
字治拾遺ニ　河社
よ。天除の海神の宮よりいてたる
時のさま。神代紀ニ　もろもろを
ゐなづく　日本紀ニ云。庁火ニ出見
尊至海島就其樹下ニ徙倚彷徨良久
有ニ一美人ニ排闥而出遂ニ王銕来當

也。珠玕ニ樹叢生而五山之根無所
連着隨潮波上下不得暫峙焉帝恐
流於西極使巨鼇十五擧首而戴之
迭為二三番六萬歳一交焉ニ云々
ちゝよりわくこゝきてなりん
のものさまにくうほそしく
ほそまつのやをむるらなりんとおもひて
ほをにおそろしれおほえそ
そぐりをそゝしめぐりて。こゝはだ
のちんありそに
徑循　あちこちとありそなそ入又
捽　そゝぐなく

ほうかんろう　仏あの名
なうござしされいふもと
のかまうへぬといつて

鄙曲之筆案ふうへ
いさほごそはるかあそ
ふうと

ひとよ。新京ハ北なるゆゑに新京を北都といひ。奈良の京ハ南にあるゆゑに南都といふ。つづらびと平安京の人南都くりづくりなりしゆゑにかくいふなるべし。

〔オヒカゼ〕便風　追風のことなり。

翁さる〔ヤテリカヤキ〕程に竹の中より光をはなつ　神代巻云。葦宇玲瓏

三年辻都山背葛野郡記

ひとよ。新京ハ北なるゆゑに新京を北都といひ。奈良の京ハ南にあるゆゑに南都といふ。つづらびと平安京の人南都くりづくりなりしゆゑにかくいふなるべし。

〔オヒカゼ〕便風　追風のことなり。

翁さる〔ヤテリカヤキ〕程に竹の中より光をはなつ　神代巻云。葦宇玲瓏

車持こ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

貴重ゝゝ日本紀

竹取抄上 卅一

宮司（ミヤツカサ）　なよたけのかぐや姫

大和物語　玉造（タマツクリ）　そうぶんなり

安倍（アベ）三連（ミムラジ）　新撰姓氏録云大彦命

孫名代天武御世献之（タテマツル）楊花勅曰何

花代奏曰辛夷（コブシ）花也群臣曰是楊花

也名代猶強奏曰辛夷花也曰賜安

倍志斐連（ヒシヒノムラジ）姓生　又阿陪（アベ）　阿閇（アベ）

同祖也　財豊慶（タカトヨヒト）麻

ふなしうなる　五十二

なよたけのかぐや姫

とんをふうじうなるやう

おやをめしうるとし之事

ふのあて　まうでゝ　ぬ　のわう

書　いとよき人のもとへ　文をつかはして

ねどみの皮といふもの　ある人の中に

こせ　ましてたゞ　おほる人の中に

きうび　くふのふ

もて　人をつかはして

玉郷（タマノサト）　なぐかくるわ　年　ま不詳

小野房守（フサモリ）

かくて　かのうたにをるおうけいを

ま　ときゝ　ときめいろこと出ろびころんて

みつるうかく　火鼠のかはごろも　國　なまま

もとめなり

本草綱目曰時珍云火鼠出
西域及南海火山其山布
野火春夏生秋冬死鼠産
其中甚大其毛及草木之
皮皆可織布污則燒之即
潔名火浣布云云

汚れる呉録曰日南北景縣有火鼠
取毛為布燒之而精名火浣布搜神
記云崑崙之墟有炎火之山上有
鳥獣草木皆生於炎火之中故有火
浣布非此草木之皮則獣之毛也魏
文帝以為火性酷烈無含養之氣著
之典論列廟門之外是時西域使人
献火浣布袈裟於是刊滅此論
按呉録ハ張勃が作りて信ずる能
あり絶てめづらしき契沖ハ
信なる事をしらでかくもいふべくあらぬものし

いとうとき商なりて
商とハいふうへハ海賊の
私布鼓の類ひを成しな
百貨をもて布帛よ
うに売アキモノスルヲいふ
てあるをアキビトとのミ
なり即秋物秋人なり
商ハ秋なり金商なとい
へり万十六商寝もと
よめばあきうとなりあき
あきうとなりあきの
それハ商のまをアキとよの
ならひなり

邂逅　長者　名義集曰西土豪族
也富商大賈積財鉅萬咸稱長者

あてびの玉もてとゝのへてとらせ
うしと傳りきこしめして、いかでかまうでこむ
つゝしき國王にあひたてまつれるかしこさ
まうせどもてつかうまつらず、かへりぬ。
れうじ、かぐや姫にいふやう、「年ごろ、いかばかりの心ざしをもちてか、かの國の人をば、とどめ給ふ。」と、いへば、「さのみなむ、あやしき心ざしどもは、見えし。」と、いへば、「さて、なほ、かぐや姫、まうでこずなりぬるを、いかゞおぼすべき。」と、いへば、「いとかしこき王の、仰せ言を、かしこまりて、まうでこざりけむ、心いとかしこ

むべ
ふぢ
とつ出ておはしまさうず。
入くやけぞ。水よ入てうはひをも
ゑなけうのおなり。 ろ氏は今。
火浣布ばかりのあり。 ろのもの
りのものを用とや。そも奈良野
浣のぬの。石岩布絲。可織為布。と不
異火未知異否。 けうとハ
ちなうて

むべ かぐや ひめの
空 そらに かくれ

之色微白頗類木綿絲縷蒙茸若蜂
粉蜂黄然每洗以油膩投之熾火中
移刻布與火同色然後取出則潔白
如雪了無所損汲為人強取以去
華夷珍貴考曰岑樓愼氏曰予閱昆
侖傳火浣布與蕉麻無異而色微青
黑曰憶少年聞中所見火浣布無
異其言晉代惠帝異國火浣布
布一端垢汚則投火中布
垢盡出而布更潔白
石崇於
(所望卅八)

やうやうさうなんどのそと
お同てよ。いろうもかを
やらめの。ふいーして。当を
かぐさおごめ。ものひて
とぶつらくく

化粧（ケサウ）「すてようなん」求衣をたてまつれ
てよろこんとし　万葉集第一。七歌
上略　あこれそこのあ丁をやあらうねく
も夏のおもひそめふかふかふ
をいろう。あれ門もていてうてなく
て。行れ出をてもう入くかくれ出あ
うるんをおくれひめ（かん）めをこころもえて
いふらはそしてかくろもなそう。わ
さて丁ふれの皮なしんでもきて。行
くわろうていそくよわれかくもの
ぜんきねうど入ちんの。空の中よん
ぬのそ丁なれぞこれをと

（竹乳上卅九）

好（コノ）みのことくとし　太皇（子カシコ）　古流指
遣て。おしきる女ありくて。神代
をお皇をうしてことくもやうきの
きて。文なぶのれる。太皇（子カシコ）とかく
ハ。恐皇と同ことしてハ同
うんもあらくる」

三連
かぐやひめの。ふいーして。当をもの
ぐさおごめ。ものひて
とぶつらくく

（竹乳上卅九）

注荘子河上翁家一一式事
荘子雑篇列御寇第三十
二ヶ条にて其ヶ条ノ但ヶ書ある乃
文と大同小異あり他も
引用せ一ま

なりのおほなり　荘子河上翁家
貧時緯蕭而食其子没刈得千金珠
謂其子取石而鍛之曰夫珠必在驪
龍頷下子遭其睡也使其寤子當為
齏粉尚奚珠有哉　大智度論曰摩
尼寶珠従龍王腦中出人得此珠毒
不能害入火不焼又曰如意珠之色
のごう　按ずるにおのおのふたしかなる色の名
あるべ一ことぞ但し一時珍本草綱
目引博物志曰張華得龍肉言得醋
則生五色云々まこと然歟なほ
ことをしらねばしるさず

大納言みわ〜らて
見給ひて乱文微笑ひて

大納言大伴御行

ほ猪集　ちくねふばれ
もゝ〳〵ぬ欤カ　のさ井
そゝふ詠とのごとゝり

おちかさま事そる　忍をけもなく
つま和人ふ乱ふ勇技きこゝぬなくと
ほこう詠ゝし　弥ハおちう伍
弥とを雷なり　かごそう伍　つまご
うゆうなるゝめに遇ぞゝし　こゝら
和ま　おほく毎ゝのりてありさし
ゝまも此し
うゝきてあるをみゝおしま仕まりて
すごろなる伍ちまをそぶてのあうれと
めぢとりなく
薄情（ウヾテ）　辛僕書　まこ不（ス、ロ）意ともそこ
ろなゝそゝし　情なゝそゝの沿行

古事記安康天皇段ニ云夜暐ニ
曙記可幸猟庭乃進馬出
行ふ侍其大長谷王之御
所人等白字多氏物云王
子ぞこゝそゝの祝ぐし
考そこゝみ尺ハ別撰皆万

竹取拙

そこごりてふ伍城ゝもてあうくいつま
れ方ともこゞ市船をあ中ゝまうゝり
ぬべくゝゆまそしくなこて船ふうちの
あ事つゝお幕入神ハおちう伍拙う
ゝもゝめゝおよ大納しハおごらてか
おうはわごゝきめそぶゝうなこんか
そこぞふのゝまみおごうこてカ
うをゝこゝらぬよ無てきうありみ
なまぐあ伍もびゝきそをそびれ海
れうたいゝぞで弥おちうるぬごし
かいもひよ弥の幸をあこば
南海あよゆまおらしぬごし

擬取
文選呉都賦橘工機
師知名加
知止利
万七[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

大納言
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

和名鈔云播磨國　明石郡

よさしてそ——　孝徳紀自雄元年二月奉賀天智十年四月奏賀正事持統紀四年正月讀天神寿詞續日本紀延暦五年二月奏神吉事延喜式云中臣進就歴宣祝詞だにづまとよ　漢ハ同しくれども和のそれハ古事ともなるべし仍てハ祈なれば式の祝詞のそれ乃ち其の初をはらひ清めの初をはらひけるもあらん　驗あらん　當やとよ

梶を葉よりつけのをろかみなどもむすのくろきをもちゐたりよごれをしらぬさんよごれをしらぬ——　孝徳紀自雄元年二月奉賀天智十年四月奏賀正事持統紀四年正月讀天神寿詞續日本紀延暦五年二月奏神吉事延喜式云中臣進就歴宣祝詞だにづまとよ　漢ハ同しくれども和のそれハ古事ともなるべし仍てハ祈なれば式の祝詞のそれ乃ち其の初をはらひ清めの初をはらひけるもあらん　驗あらん　當やとよ

梶孔社神　住吉神　八十八　不消　不敵日本　毛一筋　感通傳唐時得龍毛其色赤黄云〻よろづ代ちひ事なりて祈云〻

頬笑（ホヽエミ）の条 即ち笑ひ給ふ
頬笑とは口を含（フヽム）と頬張（ホヽバル）とを
つゞめて云（イフ）詞（コトバ）なり
ほゝゑむ梅のうめを
ゑむもゑまぬもそれぞれな
つゝしみ 源川之寿苑

ひめもすに ほゝゑみ給ふこと 微笑（ホヽエミ）
興（キョウ）、唐令（トウレイ）に云、行障（コウシャウ）六具（ムツ）の左右（サユウ）に夾（サシハサム）車（クルマ）の其
次（ツギ）に腰輿（コシコシ）和名太古之（ワミヤウタコシ）
ひめもすに ほゝゑみ給ふ
ほゝゑむ梅のうめを
興、唐令に云、行障六具の左右に夾車の其
次に腰輿和名太古之
ひめもすに ほゝゑみ給ふ
いかゞそや 事なき人は
乃ち此をえざるべし
後つかた 事なり給ひて
まかり給ひなんや
だにとは 願ふ詞なり
ひとりごち給ふ
ひとりごとに云ふ
いかゞそや 事なき人は
ぞ乃ち此をえざるべし
まかり給ひなんや 事なり給ひて
だにとは 願ふ詞なり
ひとりごち給ふ
ひとりごとに云ふ

風（フウ）もこゝろにまかせて吹（フク）ことなれば
病源論曰、風邪寒熱毒氣客経絡使血澁不通壅結
皆成腫也、又云、心煩悶而
嘔逆気急而腹満如此者
殺人云々
曰ふことなし 同書曰目
或如活枝大或如酸棗之
狀腫曰風疹発云々

松原のうへに
吟（ナガム）めるやうなれば
かゝるに 風いと
うるはしく
つゝしみ
面もわく 国ぐにの
受領（ズリヤウ）どもは
ふるまひ 国のこと
ふるまひ 国ぐにの
受領どもは
面もわく
つゝしみ
うるはしく
吟めるやうなれば
かゝるに 風いと
松原のうへに

ゝゝう　若干こおほい
北人しらぬかう方数
ま千萬ソコハクともある
日葉記

弥をまで岳よりそゝくやうにして雷ともを　霊異
記にて名をかうりて雷ともを　霊異
記りて栖軽(スガル)ヲ召てよませ給ひ雷
弥急(ミハカニ)降てといひしこそ。豊浦寺(トヨラデラ)の
飯岡(イヒヲカ)の尚(ナホ)ある所。即(スナハチ)薬(クスリ)なめて。
帝(ミカド)なをさゝ。そてなをみの
ちをまれ。の玉ちんとてそゝくれ人くの。
いせめんとしくわ。おし文きをにをとゝへ
ちまつものしうバ。文ころをされ。家いかい
ちまつものしうバ。文ころをされ。家いかい
荘子は。葉公子高(セウシカウ)死をそのむくみをもち

大地ゝお答いてみくまゝくなんぢ
ようゝもてゝゝゝなるもの。我ハなるゝみの
るゝてゝふわゝれ

日本紀曰。雄略天皇七年七月。天皇
少子部連蜾蠃(チヒサコベノムラジスガル)を詔してめゝうハく。
汝三徳(ミツノヒロ)の岳の神ゝもゝ我ゝをを
をゝゝの。ゆ為(ナカラ)ハ今ゝをゝゝ。ゝゝ
ゝゝゆゝて。投(ウ)へまゝゝし。蜾蠃これハ
ちゝ。ゝ待ゝ岳よりおりて。大なる蛇(ヲロチ)を
投つて。天皇のまへ。其雷(ソノカミ)光(ヒカリ)ヒロキ。目精(マナコ)
赫(カクヤク)タリ。天皇おゝゝもて同(オナ)ジ殿(トノ)ひゝくえ
ゝゝりもゝゝ。我ゝりなかゝを入給ひ。其

莫妄行（ナアヤキソ）

ISSEIDO 一誠堂 東京 神田

7-3
-0-2

てをらくしてうちおどろかす
早起うぐひすの初なくまね
きうぐひすハアナ玉子ざの
略語なるべし

のうぐひすの大仕大納言
ひのもとうぐひすおもとうぐひす
もあしだ下たこつなをも立
やうなるものをぶらさげていふ
とうぐひすあなうぐひすをいけ
ふよわ、そもあらめまをでゐれ
きうぐひすとそうぐひすとそうぐひす
あめうぐひす　太亘堪（アヘンカン）　唐人調謔ニ
有桃花面皮杏子眼孔之事、但し
ハ、杏よりうぬのごとく、めもちひさ九
いでうをつみなり